

2016 年 オバマ大統領が見られた光景

5月27日、広島。オバマ大統領はこの光景を生涯忘れないだろう。

戦後71年が過ぎ、初めてアメリカの現職大統領が被爆地、広島の地を踏んだ。広島平和記念公園、献花したアーチ型の慰霊碑の先に原爆ドームが見えている。被爆の悲惨さを、いまに伝える施設である。

慰霊碑から原爆ドームが見えるのは、偶然の産物ではない。そこには一人の建築家の意思が込められている。彼だけが、取り壊しが検討されていた原爆ドームを、シンボリックなものと位置づけた。「悲惨な戦争を想起させるものは復興にそぐわない」「役に立たない」「経済的ではない」。こんな批判を受けながら、死者を慰霊する空間を作り上げた。彼がいなければ、オバマ大統領はこの光景を見ることはなかった。

建築家の名前を丹下健三（1913-2005年）という。丹下は建築界のノーベル賞と称される、プリツカー賞を日本人で初めて受賞した世界的な建築家だ。

なぜ、慰霊碑の先に原爆ドームが見えるのか。そこにはすべては設計に込められた、丹下の思想がある。



上の地図を見てほしい。川を挟んで北側に原爆ドームがある。丹下案は、北の点に原爆ドームをとり、南に向かって一本の線を引く。その線を軸として、慰霊碑や広場を配置し、東西に平和記念資料館など一群の建築物を配置するというものだ。南北の線と東西の線、この線のなかに原爆の遺構、資料館、広場、祈りを捧げる場所がすべて収まっている。慰霊碑から原爆ドームが一望できるのも、丹下の計算通りだ。

なぜ、丹下はここまで、広島に深く関わるのか。

1930年と1949年 丹下健三の広島

1930年と1949年。丹下の思いの一端に触れるには、この2つの転機に、時計の針を巻き戻す必要がある。

1930年。丹下は愛媛県今治の実家を離れ、広島高等学校、いまの広島大学に進学する。

自伝「丹下健三 一本の鉛筆から」には、悩む青年、丹下の姿が淡々とした筆致で描かれている。

「理科」に進学したが、文学や芸術に惹かれていく。そんなとき、国立西洋美術館の設計者として知られる巨匠、ル・コルビジエの建築に出会い、魅了された。「理科」の知識とともに、芸術的な要素もある建築なら、情熱を持って取り組めるのではないか。

そう思い立った丹下は、世界的建築家への第一歩を、広島の地で踏み出した。

その後、東大、東大大学院と進学し、専門的に建築を学ぶ。院生時代には、戦時下の数々のコンペに入賞し、気鋭の若手建築家としての地位を確立していく。

1945年8月、丹下に父が死んだと一報が届く。数日かけて列車の切符を手に入れた丹下は広島県・尾道まで行き、実家のある今治に向かう。途中、列車の中で、新型爆弾が広島に落とされたという話が、どこからともなく伝わってきたという。



1945 年の広島。8 月 6 日に原爆が投下された



女性初のノーベル平和賞受賞者 ベルタ・フォン・ズットナー像
オランダ・ハーグ平和宮 100 周年を記念し、カーネギー財団が発注、オランダの芸術家イングリッド・ロレマ氏制作。像には「武器を捨てよ」の言葉が日本語を含め 17 カ国語で記されています。像は ①広島、②長崎、③板門店、④オーストリア・ウィーン、⑤オランダ・ハーグ平和宮への設置を希望する 5 体が制作され建立の時を待っています。